

オスカー・ランゲ

一

『人と学説』を考えるさい、すでにある特定の歴史的役割はたしおえたけれども、なおその学説が生きつづけているような人物を問題にするのがふつうであろう。もちろんそういうばあいでも叙述上の困難はつきまとう。とりわけはたされた役割が偉大であり、その学説が幾世代にもわたって生きつづけるような人物については、困難はいっそう増加するだろう。だがどんなばあいでも、ある一定の輪郭はえがかれるものであるし、事実えがかれてきている。

これに反して、現に何らかの役割をはたしつつある人物の、しかもその学説が現に変化し成長しつづけているようなばあいの『人と学説』を説明することは、およそ

関 恒 義

至難な、原則的には不可能なことであろうと思われる。のみならずここでとりあつかうオスカー・ランゲについては、筆者じしんがその母国語のポーランド語を理解しえないという悪条件がある。したがってここでは、いわゆる『人と学説』の形式どおりにはランゲをとりあつかえないことをはじめにことわっておかなければならない。にもかかわらずあえてランゲをとりあげるのは、現在、という時点では、最も問題の多い人物の一人であるからにはかならない。だから以下でも、ランゲ経済学の問題点なるものを多少なりともあきらかにするという方向で検討をすすめていきたいと思う。

まず彼の経歴が異色であり、ある傾向の人たちを迷わしがちな問題がすでにそこにあることも否定できない。一九〇四年ポーランドに生れ、ポツナン、クラコウ両大

学で教育をうけ、クラコウ大学で学位をとり、一九三一年母校の経済学講師となったが、三七年アメリカにまねかれてミシガン、カリフォルニア、スタンフォード各大学の講師、翌年シカゴ大学の助教授、三九年同教授となり、かたわらコウルズ委員会 (Cowles Commission) の委員として勢力的な研究活動に従事し、いわゆる「近代経済学」の分野では代表的な一家をなし、第二次大戦末期の一九四三—五年には計量経済学会誌『エコノメトリカ』(Econometrica) の編輯長代理を委任されたほどの人である。ところが戦後祖国ポーランドが人民民主主義国として再生するや、「近代経済学者」としての名声を捨ててポーランドに帰国し、はじめは駐米大使、国連のポーランド代表として、後にはポーランド統一労働者党中央委員、国家会議議員 (ソ連邦の最高会議幹部会員にあたる)、閣僚会議付属経済会議、あるいは計画委員会の議長などの要職にあつて、国内的・国際的に社会主義建設のために活躍するかたわら、ワルソウ大学の教授として「マルクス主義」の立場からふたび勢力的に経済学の再検討を試みつつづけているのである。

ランゲは現在このような立場にありながら、戦前にお

けるその業績があまりにも偉大であつたために、資本主義圏ではいぜんとして「近代経済学」の代表者の一人として紹介されつづけている。たとえば、この一九六三年アメリカで出版されたケンネの『一般均衡理論』においても、一般均衡理論の発展に寄与した人として、ランゲはスルツキー、ホテリング、ヒックス、ケインズ、サミュエルソン、バティンキンとならんで紹介されている⁽¹⁾、日本でもたとえば佐藤武男・矢島鈞次編『続十五大経済学』(一九六三年)のなかで、ランゲは戦前の業績だけですでに十五人のうちの一人として紹介されている。もっともこの書は、「帰国後彼は急速に赤化したといわれる」といった不見識な表現を使っていることからわかるように、学生諸君にはおよそすすめることのできないものではある。

ともあれ事情がこうである以上、戦前のランゲの「活動ぶりを直接知っていた」都留教授ならずとも、戦後のランゲが「どのような学問的活動をしているかについて、一種の好奇心にも似た関心をよせ」たとしても、けっして不思議ではないだろう。⁽²⁾ランゲの戦後の業績が日本で紹介されるようになるや、予想どおり多くの反響が

各方面からよせられたのであるが、一方には期待はずれが、そして他方にはそれと無関係ではない安堵感がこもごもまざりあっていたように思われる。たとえば『社会主義体制における統計学入門』の書評のなかで、森田優三教授は次のようにいわれる。⁽³⁾「社会主義体制下の統計学も、ランゲが本書で展開している限りにおいては、われわれの統計学と本質において異なるものではない……ランゲがブルジョア統計学者の形式主義として排斥するこれらの多くのもの(すべてのものといってもよい)は、ブルジョア統計学においても、特に彼がかつて所屬していた計量経済学の陣営の人たちによって、既に清算済みの問題である。いわばランゲ自身がかつて計量経済学の名において批判し、排斥したその同じものを今度は社会主義の名の下に排撃しているに過ぎない。」また『経済セミナー』にのった論文「近代経済学とマルクス主義」⁽⁴⁾によせた感想の中で山田雄三教授は次のようにいわれる。⁽⁵⁾「経済学の新種(リニア・プログラミングや投入産出分析など)に対する考え方が、彼自身のこれまでの学問的経歴からみて当然期待されるように、伝統的マルクス主義と違ったマルクス主義的意見として述べられている。……

結論のこの部分に関するかぎりでは、被告はマルクス主義にあるようである。」同じく青山秀夫教授は次のようにいわれる。⁽⁶⁾「ランゲの論文は、今のポーランドおよび世界の情勢をいわば戦術的に考慮した上で、この主張に適当にマルクスの扮装をあたえたものとみられる。情勢が動けば、彼固有の立場を保ちながら、扮装は変るかもしれない。」

もちろんここで、これらの評価にただちに賛意を表するといふわけにはいかないだろう。手品師ならばいざ知らず、およそ真理を深求する科学者がはたしてお好みに応じて扮装だけを変えろといった芸当を演ずることができのらうか。またすくなくともみずからは「弁証法的唯物論に依拠」しようと苦心している人の試みにたいして、「被告はマルクス主義にある」とはあまりにも実もふたもない問題以前の評価といえるのではなからうか。さらに、ランゲの批判のすべてがかりに計量経済学の水準では「既に清算済みの問題」であるとしても(私はそうは思わない、たとえば労働価値論の立場からの産業連関論の再構成など)、批判的にすすめられている研究と(たとえそれが不十分なものであろうとも)、批判の結果を形式的に

受けいれざるをえなくなった既成のそしてそれだけの著書とは、これをはっきりと区別しておくべきではなからうか。なぜなら、前者がいかに素朴なものであっても、また後者がいかに体系化されているようにとも、後者には前者のような新しい生命の息吹きはみられないからである。

ところでこれらの疑問をいちおう別とすれば、前述の諸先学者は共通して、ランゲ経済学の性格は本質的には変化していないと証言しているわけである。とすると、そこに一貫して流れているものを何と判断したらよいのだろうか。かつてシュムペーターはランゲを評して、⁽⁷⁾経済社会学の問題についてはマルクス主義を受け入れるが(そしてこれは擁護されるべきだとシュムペーターはいう)、それ以外のとくに純粹経済学の問題にかんしてはもはやマルクス主義者ではない「科学的に訓練された社会主義者」とのべているのであるが、このような机上で案出された独特の「社会主義者」でも想定するのではないかぎり一貫しているとは断定しきれないだろう。だがはたしてそうだろうか。この問題に解答を与えること、それは本稿の問題であるだけでなく、何よりもその後のランゲに

しんによって明確に答えられなければならない最大の課題であるだろう。そしてそこにランゲの『人と学説』の問題点があるといえよう。

- (1) R. E. Kuenne, *The Theory of General Economic Equilibrium*, 1963, p. 37.
- (2) 都留重人監修訳『社会主義体制における統計学入門』のまえがき参照。本書は Oskar Lange, *Teoria Statystyki, część pierwsza*, 1952 の邦訳である。
- (3) 『図書』一九五五年二月号二四—五ページ。
- (4) 『経済セミナー』一九五九年二月号。この論説は、訳者あとがき(六四ページ)によれば、ワルシャワ大学経済学部⁽⁷⁾の学術会議における報告で、はじめ週刊紙『ポリテイカ』*Polityka* 一九五八年の九号と一〇号に掲載され、のち月刊誌『高等学校生活』*Zycie szkoly wyzszej* に再録されたが、この再録論文を邦訳したものである。原題は「マルクス主義とブルジョア経済学」という。
- (5) 『経済セミナー』一九五九年三月、六一ページ。
- (6) 同誌、六二ページ。
- (7) J. A. Schumpeter, *A History of Economic Analysis* 1951. 東畑精一訳『経済分析の歴史』全七巻一九五五年、一八七一—二二ページ。

まず戦前のランゲ経済学について要約しておこう。ランゲ経済学の出発点となった論文は「マルクス経済学と近代経済理論」⁽¹⁾であるが、この論文でランゲは日本の柴田敬教授の所説⁽²⁾(マルクス経済学は資本主義の基礎的現象を理解するための武器として有力であるが均衡理論はまったく無力である)に反論して、マルクス経済学と近代「ブルジョア」経済学とはその研究領域がまったくことなり、前者は競争的資本主義から独占的資本主義ないし帝国主義への移行といったような「発展の理論」においてすぐれているが、後者は市場価格の成立過程や生産資源の最適配置などを分析するための「均衡の理論」においてすぐれていると主張し、近代経済学者が発展の問題を説明しえなかったのは、「科学そのものの失敗ではなくむしろ中産階級的忠誠にもとづく個人的失敗である」と判定する。

このような考えがシュムペーターに類似していることは、すでに杉本教授によって指摘されたところであるが⁽³⁾、さらにすすんでランゲは、マルクスの労働価値論も不完全な均衡理論であって、発展理論としての優越性は、労働価値論を採用することにあるのではなく、近代

経済学者がその階級的無関心から無視した、労働者と資本家の関係といったような制度的・社会的与件を詳細に検討することから生れたものであると結論するのである。こうしてランゲ経済学は、その出発点において、経済学の対象そのものである生産関係を与件として経済外へ追放し、労働価値論を均衡理論の枠内に狭隘化するこ

とによってマルクス主義経済学を「近代経済学的」に改悪するという大変な誤りをおかしてしまっている。

ランゲはこの当時、効用の可側性にかんする論説も発表している⁽⁴⁾のであるが、彼は二つの領域を区別し、均衡理論の研究に十分な意義を認めておいてから、マルクス経済学ほんらいの領域であるべき発展理論の方向へはすすまずに、効用価値論からワルラス的一般均衡理論へとという近代的な道をすすんでいくことになるのである。マルクスをもふくめた古典経済学にたいして近代経済学を対置するという傾向がブルジョア経済学のなかに普遍化しはじめたのもこのころからで、ランゲの試みはその意味でも重要な役割をはたしているといえるだろう⁽⁵⁾。

このような均衡理論の方向から次にランゲが問題にするのは、いわゆる経済計算論争に関連する領域である。

経済計算論争は、一九二〇年にミーゼスが、社会主義経済は経済計算が不可能であることから失敗に終ると宣言したことを契機として発生するのであるが、その後初期の強硬論はかけをひそめ、経済計算は理論的には可能だが実際には不可能であるというハイエクなどの矛盾した主張⁽⁷⁾に後退し、さらにディキンソンやランゲなどの肯定論へと席をゆずらざるをえなくなるといふ経過をたどる。

ランゲは、「社会主義の経済理論について」⁽⁹⁾のなかで、次のような社会主義社会、つまり生産手段公有、消費選択・職業選択は自由で、消費者選好が生産・資源配分において指導原理となるような社会を想定し、従来の競争的資本主義市場の一般均衡理論に多少の修正（利潤の極大化をあらさまにはかかげない）をほどこしたうえで、伝統的な効用価値論⁽⁸⁾の極大原則や限界生産力説さらにはのちにケインズによって否定された労働供給関数をさえ形式的にはほとんどそのまま採用することによって、試行錯誤の手続きをとおして、社会主義のもとでも経済計算が可能であると主張している。さらに消費・職業の選択が自由でない強制的な社会主義のもとでも、官

僚的な選好表が与えられれば合理的な経済計算は可能であるが、このような社会は文明人には推奨できないと付言している。

ランゲのこのような社会主義観にたいしては、多くの批判が提出された。たとえばドップは、そこでは資本主義のもつ不安定性もまたそのまま受けつがれることになると警告しているし、反社会主義者のハイエクでさえ正統的社会主義者がこの提案を受けいれないだろうと揶揄しているが、ランゲの提案は、労働価値論とはまったく無関係に、「近代経済学」の諸前提をそのまま無批判的に援用してなされているところにその特徴がある。もっとも、ランゲも労働価値論をまったく否定しているわけではなく、この論説の付録で、労働価値論の立場から接近するときでも効用の問題を回避することはできないし、技術として限界分析という近代的方法が必要となることを強調している。だがこれもたんなる指摘に終り、労働価値論にもとづく分析は戦後のランゲに期待されなければならぬことになる。ほんらい社会主義建設にとつては、何よりも生産の釣合いのとれた計画的発展が第一義的な問題であり、そのためにまさに労働価値論が大

前提とならなければならぬのであるが、この段階でのランゲの社会主義は、たとえ可能であるとしても、消費者中心の合理的価格制定の計画機関というまことに狭隘な視野以上にはすすみえないのである。⁽¹²⁾ただここで指摘しておかなければならない点は、このような狭隘な立場からではあるが、資本主義にたいする社会主義の優越性を、したがってその移行の必然性を、ランゲがはっきりと確認していることで、これはそれなりに評価されてしかるべきであろう。

社会主義不可能論から出発した経済計算論争が、ランゲのこの段階で、多くの問題を含みながらも、社会主義の優越性とそれへの移行の必然性という形で結着せざるをえなかったということ、これはやはり基本的には、社会主義ソ連邦の着実急速な発展と資本主義の危機過程の深化の一つの反映であるとななければならぬ。ランゲ経済学はまさに資本主義の危機過程の産物として登場し発展したということができよう。たしかにそこには多くの進歩的萌芽もまたふくまれていたのである。だが全体としては、その進歩的性格をもふくめて、ランゲ経済学は社会主義ないしはマルクス主義経済学を無視しえなく

なったブルジョア経済学のあらたな流れ（おそらく左派とでもいいだろう）のチャンピオンとしての役割をになわされるようになったことも否定できないところであろう。アメリカで職をえてからのランゲはますます忠実な一般均衡理論の使徒となり、その強力な推進者の一人となっていくのである。

まず厚生経済学について、彼はバークソンの社会的厚生関数を社会的価値関数 (social value function) という形で、各個人の社会的重要性をなんらかの（たとえば国会というような公共機関の）立場から秤量した評価規準（目的）として把握し、厚生経済学をより具体化しようとして試みている。⁽¹³⁾このほか、ヒックスの安定条件の動学化の試み、⁽¹⁴⁾セイ法則やワルラス法則の厳密化の試み、⁽¹⁵⁾さらにケインズの単純乗数理論を複合乗数理論に拡大する試み⁽¹⁶⁾などをあげることができるが、この期のもっとも重要な著作は『価格伸縮性と雇傭』⁽¹⁷⁾である。ランゲは本書で、ケインズと「古典派」の争点となっている賃金の伸縮性が雇用量を増大させるかどうかという問題にたいして、ケインズおよび「古典派」の双方をふくむ一般的な一般均衡体系を作成し、この立場から「古典派」のいう

価格の伸縮性が完全雇用と均衡の安定をもたらすのは特殊なばあいであることを証明している。

ランゲが、明晰・簡潔・巧妙さの点でまた透徹した推理の点で、非凡な人物であることはいわゆる「近代経済学者」のあいだには定評がある⁽¹⁸⁾。これは上述の均衡理論にかんする諸業績のなかにも遺憾なく発揮されていることである。彼が形式論理的思考方法において抜群の実力者であるということはもちろん高く評価されるべきことであるが、しかしそれ以上のものでないということは、すくなくとも経済学者ランゲの大成にとっては致命的な限界であるといえるだろう。そしてこのことは、ランゲ経済学の集大成ともいわれるべき戦前最後の著作『経済学の範囲と方法』⁽¹⁹⁾にも集約的に表現されているのである。ランゲはそこで次のように示している。

経済学は稀少資源管理にかんする科学であり、欲望をみたすために稀少資源に働きかける人間活動を経済活動という。経済活動は人間のあいだのもろもろの社会的活動や関係に依存する一方、逆にこれらに作用してあらたにこれらを作り出すのであるが、この分野の研究は経済社会学に属する。稀少資源の管理には一定不変の型があ

り、経済法則はこの一定不変の型と関連している。法則というものは条件的であり、社会組織や制度によって制限される。ある制度のもとではなりたつが他の制度のもとではなりたないものは「歴史的に制限された法則」といわれる。経済法則は、若干の基礎命題(假定・公準)から論理的(数学的)規則によって導かれる命題(定理)の演繹系であらわすことができる。この体系(理論・仮設・モデル)は経験によって裏づけられなければならない。それが論理学や純粋数学とことなる点である。経験と理論のあいだにはつねにギャップがあるから、あるていどの近似はまぬがれないが、経験による近似的裏づけを検証といい、この検証をとりあつかう分野を計量経済学という。稀少資源の管理はある社会目的によって評価されることができ、この分野を厚生経済学という。経済学の陳述はつねに客観的有効性をもたなければならず、厚生経済学においてもその点にかわりはない。もちろん目的そのものについては個人間に不一致が存在している。しかしかりにそれが存在したとしても、いったん目的が設定されれば、論理的規則と検証の過程からそれに特有の客観的有効性が決定されるのである。個人間の不

一致を生ぜしめる基本的要因はイデオロギーであり、このイデオロギーの研究は知識社会学の領域に属する。自然科学・社会科学をとわず、科学的活動はつねにイデオロギー的要素をふくみ、もしこれがなければ科学の発展はなされないだろう。たとえば、「進歩的動機は有効な科学的成果をあげるうえで有利に作用し、保守的動機は不利に作用する。」しかしそれにもかかわらず、科学的陳述の有効性はイデオロギーそのものによっては左右されないのである。

ここに示された主張にはいろいろの欠陥がある。人との関係(ランゲではこれはすべて社会学の領域に属する)ではなしに人と物との関係を経済学の主要対象とみなすという伝統的な俗流経済学の方法がとられていること、理論と現実(経験)を結びつける基本的な論理がないこと、数学をまったく無批判的に利用していること、形式的な分類に終始しすぎていること、イデオロギーと衝動を混同していることなど、また進歩的イデオロギーと保守的イデオロギーの差を適切に指摘しながらも、なぜそうなるのかという歴史的視角をまったく欠いていることなど、そもそもその基本的態度に根本的な問題がある

が、それはともかくとして、上述のように均衡理論にたいていしてなすべきことをなし、体系が方法的に確立されてしまえば、次になされるべき仕事の分野は発展の理論ということになるだろう。そしてそれがシュムペーター流に進展していくことになれば、まさに「科学的に訓練された社会主義者」としての評価と名声は一貫しつづけたことであろうと思われる。だが事態は、かならずしもそのような順調にはすすんでいかなかったのである。

(1) Marxian Economics and Modern Economic Theory, *Review of Economic Studies*, Vol. II, 1934~35.

(2) Kei Shibata, Marx's Analysis of Capitalism and the General Equilibrium Theory of the Lausanne School, *The Kyoto University Economic Review*, July 1933.

(3) 杉本栄一「近代理論経済学とマルクス経済学」季刊『理論』第一号、一九四六年九月、のち『近代経済学の基本性格』一九四九年に所収、を参照。杉本教授はこのランゲの論説を多くの点で批判しているが、全体としては「内在的批判」の典型として高く評価している。事実、日本における「内在的批判」方式の源流の一つをこのランゲに求めることができる。「内在的批判」の欠陥については筆者も他のところでしばしばふれたので省略するが、杉本教授のここでのランゲ批判についてだけいえば、まだ不徹底

であるといわなければならない。たとえば、ランゲによつて分離された「この二つの法則は（発展と均衡にかんする）唯物弁証法的に統一的に把握されなければならない」(『基本問題』一九三三ページ)といわれるのであるが、「この二つ」とは弁証法とはまったく縁もゆかりもないことで、折衷以外の何物でもないだろう。

(4) The Determinateness of the Utility Function. *Review of Economic Studies*, Vol. I, 1934. A Note on the Determinateness of the Utility Function. *Review of Economic Studies*, Vol. II, 1934~5. この二つの論文は、ランゲはフーバー (Mathematical Investigation in the Theory of Value and Prices, Part I.) の効用可測の論証の欠陥を補足することによつて、効用の測定はフーバーがいうように外部的な統計資料だけでは不可能で、質問をとおして個人の心理的反応を確認する必要があると結論する。

(5) ランゲは「ブルジョア」経済学 ("Bourgeois" economics) / 近代「ブルジョア」経済学 (Modern "Bourgeois" economics) / 古典経済学 (Classical economy) / マルクス経済学 (Marxian economics) / 近代経済理論 (Modern economic theory) を使いわけてゐるが、「ブルジョア」経済学は近代「ブルジョア」経済学として近代経済理論へと純化していったが、マルクス経済学は理論的にはいぜんとして古典経済学の水準にとどまっていると主張してゐる。

(6) L. von Mises, Die Wirtschaftsrechnung im Sozialistischen Gemeinwesen. *Archiv für Sozialwissenschaft*, 1920. 64 F. A. von Hayek (ed.), *Collectivist Economic Planning*, 1935. 民間真実説訳『集産主義計画経済の理窟』一九五一年に再録。

(7) F. A. von Hayek, *op. cit.*, Chap. I, The Nature and History of the Problem, Chap. V, The Present State of Debate.

(8) H. D. Dickinson, Formation in a Socialist Community. *Economic Journal*, June 1933. *Economics of Socialism*, 1939.

(9) On the Economic Theory of Socialism, *Review of Economic Studies*, Vol. IV, 1936~7. 64 B. E. Lipincott (ed.), *On the Economic Theory of Socialism*, 1938. 土屋清訳『計画経済理論』一九五一年に再録。土屋訳の旧版は「ハインツ・キッパの論文を4つめて一九四三年に出版された」。

(10) M. Dobb, *On Economic Theory and Socialism*, 1935. 都留重人ほか三名訳『経済理論と社会主義』I 二一九五八年、第三章「社会主義経済における経済計算の問題」にかなり三つの論説「五八—九ページ」。

(11) F. A. von Hayek, *Socialist Calculation—the 'Competitive' Solution*, *Economica*, May 1940. 土屋清旧訳、前掲書一五三—四ページ。

(12) よりくわしいランゲ批判として、ドブの「前掲論文」

および池田顯昭「近代経済学の社会主義経済論」、『講座近代経済学批判』Ⅲ一九五七年所収、を参照されたい。

- (13) The Foundations of Welfare Economics, *Econometrica*, Vol. 10, 1942.
- (14) The Stability of Economic Equilibrium, *Econometrica*, Vol. 10, 1942.
- (15) Say's Law, a Restatement and Criticism, in *Studies in Mathematical Economics and Econometrics*, ed. by O. Lange and others, 1942.
- (16) The Theory of the Multiplier, *Econometrica* Vol. 11, 1943.
- (17) *Price Flexibility and Employment*, 1944. 安井琢磨・福岡正夫訳『価格伸縮性と雇傭』一九五三年。
- (18) たとえば、安井・福岡訳、同書、訳者序文参照。
- (19) The Scope and Methode of Economics, *Review of Economic Studies*, Vol. XIII & Vol. XIV, 1945-7

三

さてランゲ経済学は、戦後どのように発展し変貌していったか、以下順をおって検討することにしよう。⁽¹⁾

まず『統計学入門』についてその骨子を本稿に関連のある範囲で要約しよう。ブルジョア統計学者はあやまった実証主義に依拠しているために、たんに形式的数学的

記述だけに限定することによって数理形式主義におちいるか、あるいは大量過程の規則性を人間意志に左右されない不変の自然法則と解釈して宿命論におちいるか、そのいずれかである。たとえば、所得分布にかんするパレートの法則や生産発展速度にかんする逓減曲線の理論を自然法則のように考えるのはその例である。統計学の正しい基礎は弁証法的唯物論と史的唯物論なくすくマルクス主義経済学によって与えられる。「弁証法的唯物論は因果関係の理論をあたえるものであり、とくに必然性と偶然性を因果関係の二つの異なる種類として把えるものである。」「二種類の原因とは、あらゆる場合に作用する主原因と個々の場合にのみ作用する副次的原因であり、統計的規則性は一連の主原因と副次的原因とが存在する場合にみられるのであるが、主原因によってのみ決定づけられるばあい必然で、これが歴史的規則性の基礎となり、副次的原因が作用するばあいは偶然が支配することになる。大量過程においては主原因の恒常的作用から生ずる規則性が種々の副次的諸原因の作用を通じて大多数法則としてあらわれる。

統計学の基礎づけをこのように与えることによってラ

ランゲは、「マルクス・レーニン主義の要請にこたえ」ようとつとめるのであるが、とうぜんのことながらその論調は戦前のものとはがらりとかわっている。かつてはたかだか与件として社会的にしか考えられていなかった諸要素が基本的な地位を占めるようになる。かつては彼じしん加担していたブルジョア的実証主義が批判の矢面にたたされる。相互依存という不可知論的關係にかわって因果關係が明示されるようになる。ランゲのなかに何らかの質的転換がおこなわれたことには疑問の余地はないだろう。だがしかし、問題はまだまだ残されている。上杉正一郎教授が指摘されるように、⁽²⁾ランゲは弁証法的唯物論を単純な因果關係に解消してしまい、矛盾・発展の問題をいっさい無視してしまう。ランゲ経済学の非歴史的性格はここでもふたたび露呈されざるをえないのである。

さらに、形式論理的数学的思考方法においてぬきんでていたランゲが、この方法をどのように弁証法的唯物論のなかへ位置づけていくかということ、つまりマルクス主義における数学利用の問題は、おそらくマルクス主義者ランゲにとっては最大の課題であると同時に一つの義

務であると思われるのであるが、本書では、この部分についてはほとんど手掛りらしいものが与えられていない。もっとも本書が刊行された当時は、マルクス主義全体に「数理形式主義的偏向」という名のもとにこの種の問題を回避する傾向があったことを否定できないのであるが、本書でも、一方では無批判的に形式主義を紹介しながら、他方では「数理形式主義」の名のもとに排除するという混乱がみられるのである。ランゲにおいてもこの種の問題にたいする解答は、社会主義国における数学利用が緊急に重要な課題として俎上にのぼるようになるにつれ、ようやく検討されるようになるのである。そこで次には「近代経済学とマルクス主義」について要約しておこう。

科学としての経済学は古典派経済学の成立とともに発生したのであるが、古典派経済学の科学性は、資本主義的生産様式を絶対視してそれを経済発展の唯一の合理的方法とみなしていたために制限されざるをえなかった。古典派経済学は二つの方向へ移行していった。一つは俗流経済学で、生産關係の分析を放棄しブルジョアジーの関心内に科学分析を制限することによって弁護論として

の役割を強めていった。他はマルクス主義経済学で、資本主義の生産様式の歴史的な性格を明らかにしてその発生と発展の法則を説明し、これによって労働運動の方針をつくりあげていった。しかし労働運動の実際と必要からうまれたこの科学にとっては、流通過程の説明は二義的であって重要な関心事とはならなかった。この問題の説明は、部分的ではあるが、俗流経済学の復活として特徴づけられる限界効用学派によってはたされた。のみならずこの学派になると、弁護論的性格にも多少の変化が生じ、旧俗流経済学がもつた資本弁護論に終始したのにくらべて、この学派は、独占資本主義の時期には独占資本主義にたいする中小ブルジョアの批判の基礎を提供した。厚生経済学についていえば、社会経済的合理性の観点から現代資本主義のいくつかの現象を批判的に分析している。

独占資本主義さらに国家独占資本主義の時代には、一方には科学的研究の職業化という事態が生じ、経済研究の中立化・技術化が進行する。他方では大独占体じしんが、その諸政策を効果あらしめるために経済的合理性を知る必要が生じ、客観的な科学知識にたいする注文を提

出せざるをえなくなる。このような状況のなかから、「ブルジョア経済学の非弁護論化と科学化の過程」と定義される計量経済学が登場してくることになる。のみならず、「科学的研究の内的法則性・内的弁証法」は資本主義の必要の限界をこえて研究を進展させ、資本主義の生産関係の枠内では不可能な、社会主義のもとではじめて実際の意義をもつような管理と指導の用具(たとえばプログラミングやサイバネティクス)をつくりだした。もとよりこのような非弁護論化と科学化の過程は古い弁護論的伝統からたえず圧力を加えられる。しかし経済学の職業化や大学インテリゲンチアの自立化は、実証主義の旗のもとにこの圧力に抵抗しそれを打破している。

ところで一連の国で達成されたプロレタリアートの独裁は、社会主義経済の組織と指導という新しい社会的注文をつくりだしたのであるが、一方では、ブルジョア経済学にたいするイデオロギー的偏見がその非弁護論化と科学化の過程の産物である諸理論・諸技術を有効に摂取することを困難にさせ、他方では、マルクス主義の「弁護論的・教条主義的退化の過程」と定義されるような超中央集権的官僚制度がいぜんとして強化され自主的研究

が阻害されていたために、マルクス主義はこの領域では必要な貧困化におちいらざるをえなかった。現代マルクス主義にとっては、このような退化の遺物を払拭してマルクス主義を若がえらせ、ブルジョア経済学の諸成果を批判的に習得し、これを社会主義経済に特有な科学的分析法に発展させることが必要である。ブルジョア経済学における成果は、たとえ科学的であるとしても一面的・断片的で、精密で正確なマルクス主義的分析法を適用してはじめて十全なものとなりうるのである。

戦前のランゲの主張と比較すれば、格段のちがいがあ
ることはここで指摘するまでもないことであろう。だが、社会主義国における数学利用がいかに緊急な課題であるからといって、計量経済学を無批判的に科学化してそのまま社会主義にもちこむことは許されない。均衡方程式系を用いて経済計算の可能性を論証しようとした、かつてのランゲの誤りをここでふたたびくりかえすことになりかねない。ランゲのこのような方法的態度にたいしては、数学的方法を推奨するソ連の経済学者でさえ批判的である。もちろんランゲは、批判的習得を、さらにマルクス主義的分析法への発展を強調するのであるが、

いうところのマルクス主義的分析法とは何なのかあきらかでない。彼は計量経済学を定義して、「具体的量的法則の統計的方法による決定にかんする科学」というのであるが、このように量的側面だけをきりはなしてとりあつかう態度じたいに問題があるといわなければならないだろう。

しかも計量経済学の非弁護論化・科学化が科学の内的弁証法というようにないたってマルクス主義的観点から導かれていただけに、問題の根は深いといわざるをえない。内的弁証法も究極においては歴史の弁証法的発展を反映するものである以上、一足さきに非弁護論化された計量経済学のなかには強力な歴史の推進力がひそんでいるのだからならない。ランゲはこれを、大学インテリゲンチアの自立化という狭い枠のなかに求めるのであるが、かりに自立化が可能であるとしても、これを支えているものは何なのだろうか。それが実証主義という旗でないことだけはたしかだろう。ランゲには、経済学の性格をその研究にたずさわる経済学者じしんの階級的条件と直接に結びつけるという態度が、この点は戦前から一貫してみうけられるのだが、これはランゲの質的転換

がまだ不十分であることを示す一例となるだろう。

さらにランゲは、マルクス主義の一部におこった多少のたちおくれを性急に批判するのあまり、社会主義でえられた理論的諸成果（たとえば基盤綱バランスをもふくめたバランス論など）をまったく無視してしまっている。これをスターリン批判の行きすぎということははたしていいすぎだろうか。いったいランゲは社会主義についてどんな考えをもっているのだろうか。この点を『社会主義政治経済学の諸問題』所収の諸論文を中心に要約してみよう。

毛沢東が示すように社会主義もまた矛盾をとおして発展する。社会発展の動因としての基本的矛盾は、生産力と生産関係のあいだの矛盾および生産様式と上部構造のあいだの矛盾の二つである。もちろん社会主義には生産関係に基礎をおく階級は存在しないから敵対的矛盾も存在しないが、上部構造の組織のなかにその経済的基礎をもつ社会的階層はいぜんとして存在する。だから階層間の対立はおこりうるのである。社会主義で作用する経済法則を四つの型に区別することができる。第一はいかなる生産様式にもあてはまる一般的法則であり、第二は社

会主義的生産様式にだけ特有な法則である。第三は、第一の法則ほどに一般的ではないが、一つ以上の生産様式にあてはまる法則で、価値法則がそうである。価値法則は、生産手段の社会主義的所有形態がただ一とおり（たとえば国有）であったとしても、社会的生産物を消費者の個人的所有に移しかえる分配があるかぎり、作用するものとみなされなければならない。第四は、第二よりもっと特殊な法則として、社会主義の管理様式にかかわる法則である。たとえば社会主義企業は、労働者の自治体であると同時に社会的利益の管理者として行動しなければならないが、これらの両面はときにはあい反することがあり、たえずアナルコ・サンディカリズム的退化や官僚主義的退化の危険にさらされている。だからここでは、円滑な生産を遂行しうるような管理様式の合則性を追求することが必要である。

社会主義の本質的特徴は経済計画にある。資本主義から社会主義への過渡期には計画ならびに管理は高度に中央集権化されている。集権的方法は、すみやかに社会主義的生産様式を確立する上で不可欠な手段であるが、社会主義建設が、高度資本主義国においてでなく、低開発

の資本主義で一国社会主義として遂行されたために過度に集権的な官僚制度が強化された。だがこれは社会主義にとって本質的なことではない。経済が発展するにつれて過度の集権化は障碍となってくる。社会主義建設の弁証法的発展は、このような集権的官僚制の欠陥を克服する方向にむかって進みはじめ、社会主義の新しい段階が成熟する。現在はまだにそういう時期で、経済の指導・管理の新しい民主的形態が社会主義諸国にあらわれはじめてつつある。

社会主義計画はたんに整合的であるだけでなく、さらに「能動的計画」(active plan)として経済発展の主要な輪郭を決定するものでなければならない。そのために、蓄積と消費への国民所得の分割(成長速度を決定する)と経済諸部門間への投資の配分(発展の方向を決定する)の二つが計画のなかにふくまなければならない。計画実現のための方法としては、過渡期において採用されたような「行政的方法」(administrative means)と経済的刺戟の体系を設定するという「経済的方法」(economic means)とがあるが、後者はあるていどの分権化を要求することになる。じっさいの計画ではこの双方が

いろいろな割合で利用されることになるが、現在の段階では経済的方法の方に重点がおかれるべきであろう。

経済計画はいうまでもなく経済法則にのっとって推進されなければならないが、他方では計画が作りだした刺戟が作用する結果、新しい法則が生れ、あるていどの自動的過程が発生することになる。経済的方法による分権化が推進されれば、需要供給にかなする市場条件も作用するようになり、需要供給の均衡するような市場価格が成立することになる。もちろん市場価格だけでは不十分で、社会的生産費を反映する計算価格を採用し、これと市場価格を対比することによって生産の規模を決定するという方策を採用しなければならないだろう。現在われわれは、生産費に利潤を加えた「正常価格」(normal price)を算定するよう提案しているのであるが、これをめぐっては多くの論争が展開されている。しかしともあれ、行政的強制的な方法に依存していた過渡期は終りをづけ、経済的方法にもとづくそれ独自の経済法則に依存するていどをますます高めていく社会主義経済へと成熟しつつあると結論することはできるだろう。

これがランゲのいづく社会主義観であり、社会主義へ

の提案であるが、これとかつての彼の社会主義観とのあいだには雲泥の差があることについては、ここであらためてふれる必要はないだろう。だがここでもまた、あらたな多くの問題点を指摘することができよう。紙数の関係でくわしい検討を避けて、問題点を列挙すれば、社会主義における第一の形態の矛盾が不明確であること、第二の形態の矛盾を強調しすぎる、法則を四つの型に区別すること、とくにその第三について、資本主義と社会主義における価値法則の質的差異が不明瞭になること、また法則の第四について、これを法則ということが許されるかどうかということ、行政的方法と経済的方法をまったく対立したものとして、同じく集権化と分権化とをまったく対立したものとしてとらえているということ、したがって戦前いろいろの形式主義的偏向が完全には克服されていないということ、さらに計画の高度化がたんに自動的な市場法則の作用という前社会主義的な形態でしか把握されていないということ、そういう意味でかつての経済計算論の残滓物がふくまれているということ、などなど。不十分な不徹底な見解は随所にみられるのである。彼の主張のなには、多くの斬新な萌芽

があることは認められるのであるが、しかし彼の質的転換がまだかならずしも十分にはなされていないと思うのは、おそらく筆者だけではないだろう。人を迷わす原因は、どうやらマルクス主義者としてのランゲの不徹底さに求められなければならないだろう。

(1) 戦後のランゲの著作として、私が目をとおすことのできたものは、次のとおりである。1 『社会主義体制における統計学入門』一九五三年。1、の注(2)参照。本書は、計画および統計専門学校統計学部における一九五〇—五一学年度におこなった講義を基礎として作られたものである。2 『経済計画評論』(Essays on Economic Planning, 1960. 本書はインド統計研究所が出版したもので、ランゲがインド統計研究所に滞在していた一九五五—六一年にかかれた三つの論文を収録している。3 「投入産出分析にかんする若干の考察」、岡稔訳ネムチノフ『マルクス経済学の数学的方法』上、に収録。これははじめ「Observations on Input-Output Analysis, Sankhyā, Indian Journal of Statistics, 1957, として発表されたが、その「Применение математики в экономических исследованиях, под редакцией В. Г. Немычкова, 1959, にランゲの増補を加えてロシア訳された。前記岡訳は本書からの邦訳である。4 「近代経済学とマルクス主義」1、の注(4)参照。5 『計量経済学入門』(Introduction to Econometrics, Trans-

lated by Eugene Lepa, 1959. ポーランド語初版は一九五七年にでているが、翻訳版は著者の手によって改訂増補された。本書はワルソウ大学経済学部講義にもとづいて作成された。『経済評論』に一部邦訳されたが、全訳が近く刊行の予定である。6 『政治経済学』第一巻総説、*Political Economy*, vol. 1, *General Problems*, (Translated by A. H. Walker, 1963. 本書は全三巻からなり、一九五七年から書きはじめられ、一九五九年にポーランド語で出版された。7 『経済発展、計画および国際協力』*Economic Development, Planning and International Cooperation*, 1961. これはエジプトの中央銀行が発行したマンフレットで、エジプトにおける講演集である。8 『社会主義政治経済学の諸問題』*Problems of Political Economy of Socialism*, Edited by Oskar Lange, 1962. 本書のポーランド版は一九五九年にでているが、十二人の論文集である。

ランゲは *Political Economy of Socialism, Role of Planning in Socialist Economy, Basic Problems of Socialist Construction*, の三編をのせている。これらのうち計量経済学の内容に関連のある部分については、「ランゲの計量経済学について」という題で、別の機会にふれる予定である。また6の文献については、この原稿を書きあげたあとで入手したので、本稿には、十分に反映させることができなかった。これも別の機会に検討することにした。

(2) 書評「オスカー・ランゲ『統計理論』『統計学』第一巻第一号、一九五五年六月、のち『経済学と統計』一九五九年に再録。

(3) たとえば、岡稔訳、前掲書上五ページ参照。

(4) *Introduction to Econometrics*, p. 6.

(一橋大学助教授)